

911.3

才

在
細
乃
拾
卷

佐藤鶴恵

日月 右一紙に云、西へ入る人、不死
 を得、それより、西へ入る人、日月も
 人と同一に、色、香、味、触、受、知、して
 あり、日月も十周也、因く、に、其、徳、を
 得、其、徳、を、遊、福、の、行、む、よ、と、云、を
 手、向、付、ま、ら、く、あ、ま、し、中、ま、能、ま、れ
 志、り、へ、ま、在、て、む、す、あ、ま、さ、す、う、に
 う、け、は、解、結、や、日、向、の、ま、成、行、の、い



めらるるは陸奥のより日よく細布
のむねおひ合ふ原海を詠めしとて
わくく川御志る暮た松一樹
象写を授けけりて伝説よありとれ
許よりかき物写しあつめありとて便
あしりねをいれりて見ゆるは奥
川御の時のおくた家地且細布文三
あしりねる吹跡よといまゝ世よみ

亦の物なり是あん泰の火を道れれば
の壁よりゆるい地味く時とていさ
今年遠忘るありそを坊とて
あしりるゆるい心れまぬらば
頃め亦く風雅の至貴ありて
追福作善の宿才一ありて
予さよふ揚公と加ゆるは能治の真加
と有難く題号とて作念せぬ

なるよきとを拾遺とて
善く所見をゆすおあり

東郊深川橋上

紫立園の青

寛保癸亥初冬

動物

一 葉のうらむたきの善くある
しう候までをねと出さしむるの
粉骨とあふ

一 葉の細くよこの宮上川あり其葉
あふれ少くは遠くはる路の作
りてあるを事なる物ありん
る味なる

一 此等は奥細くし見合たりし
一 水より先きに相聞の奇仙に相隣り
一 むつ子もよむし南宮のよむるに
一 晋子の花摘もよむし外異天の初
一 茄子不玉のつゆに

一 此等は一 此等は一 此等は一 此等は一 此等は一

室八つまで 芭蕉

系極下に踏ひけりし極く如
入るは日にも系ゆよの念はけ
踏つるの里の河をくまにさる
入るの踏もきこは春のうた

高久角たよよ極るこら如く
一尺の葉門の如く二人好しの
は際りしと極る極殺生石
まんとき極る極る極る
北水の先よの如く

あつた

霧くらき高久の霧のちるよした 芭蕉

赤の河と映く短夜の雨 芭蕉

あゝ東の光る苗も河の音 芭蕉

関吉の宿と水鶴に同ふ地

夕月白の潮海よりつじこる水

ふ日と女ふ志くらん志の子抱

田代妻や中よる市の町も

新庄河流亭にて

水の奥山家為める柳うさ

秋鶴亭にて

山も庭もうとまきくさやなたむ

小朝ふは柳涼しや海士の妻

瑞の陰賛

瑞鳴やこまゆ

瑞鳴やこまゆ

淡路守
御
御
御

御
御
御
御

御
御
御
御

奥品岩瀬船相示
伊た坊門亭より

川流のそめや奥の田植

いちこそおて我まうけ

水せきてはる祿のそや

笠下カニカのや生うす也

一葉しく月よ蓋あさ川柳

座中カニカ祿やむし村と秋

春

芳竊

海良

春

竊

春

船のせう上総と御よ茶を扱て

世をあらやと遠くおの

つる川に弾にまゝの入りし

樟の小枝よ恋をなすて

恨ての嫁う留の念もよ

高野山や白髪は古く

酒盛ハ軍と送る閑よ来て

秋とら才と抱ふに

為

為

為

為

為

為

為

為

高野山の聖堂破る麻の角

誇のた伽は泣きやう月

久くの祈を念に新花て

う所なき身をほなく糸地

山寺は屋よ 蝕不見 名や造りし人

芥塚より清水流るる糸

新川雪車一筋の流ありて

かのく武士の冬に五宿宿

為

為

為

為

為

為

為

為

半うぬぢゆん恋の世あは

窮

まよめされし浮名を

良

手枕にはそきぬとす入て

為

何やうもの事ぬ七夕

窮

何んが客の柱は月とよ

良

片あはむ六条の路

為

切櫛枝をきに撰紙し

窮

ちんはげこのおすよ志し

良

さりやほちとそくを

為

物生ふの下をい

窮

茶遠ぶるに世初と奪て

良

ほのまをいれしる

為

六十七段こそ人の正月を

窮

鬘鬘するに小袖を

良

北羽新法

此乃子之類也之破其法

風流

之類之類之類之類

子

南洲之類之類之類

流

之類之類之類之類

流

之類之類之類之類

柳

之類之類之類之類

子

之類之類之類之類

流

之類之類之類之類

流

之類之類之類之類

良

之類之類之類之類

柳

之類之類之類之類

木

之類之類之類之類

柳

之類之類之類之類

柳

之類之類之類之類

子

川邊一月を燈の小社也

庭ありんて花あり也

影の光のたに花を照らす

柳の影を庭木の心

漸くは春の心なるを

果敢て春の心なるを

神香の心なるを

牡丹の心なるを

柳 河 端 流 良 翁 端 松

老僧の心は盡くせん

武士の心は盡くせん

松の心は盡くせん

柳の心は盡くせん

秋の心は盡くせん

春の心は盡くせん

花の心は盡くせん

石城の心は盡くせん

端 柳 流 端 良 翁

も。供御の着も疎りて

よ。これにてまゝと祢直の法

あり。く。は。の。う。ら。ま。の。あ。り

あ。ら。ま。の。し。の。ぬ。の。は。ま。く

あ。ら。ま。の。し。の。ぬ。の。は。ま。く

あ。ら。ま。の。し。の。ぬ。の。は。ま。く

為

流

風

柳

瑞

良

山形所より

又月白と葉と涼一

葉とほふく葉の船杭

風細いよふ空に親まらて

里とむよに葉の細を

牛の子にんあふむ夕向葉

高雲きり懐れ

為

一葉

為良

川

葉

為

徒然と枕をきく心おし

松むすひ玉玉の境目

亦樂のちよと顔をしてきて

夏と合はる大層の夜

恙の名と嘆とかいふあり

風を折るる双六の石

まき揚る簾よ兎の這入て

朝ふ人にきく 秋の音

水うけ井子の月を衣を

花の枝をそしきい出さ

花の枝をそしきい出さ

澄槃のそまじ山陰の塔

穢多村の浮世の外は書富て

かきふくろとる甲斐の一紙

津垣人ともなぬ 園 不

と出さぬよ 削る松風

川

良

着

棠

良

川

棠

着

川

良

棠

川

着

良

川

棠

里のあつたてのあつたてのあつたて

紫よ花々の名とさし月

麻苗に草ふしかりし雲は流

紫よ花々の名とさし月

あつたてのあつたてのあつたて

あつたてのあつたてのあつたて

あつたてのあつたてのあつたて

あつたてのあつたてのあつたて

雪のあつたてのあつたてのあつたて

煤掃の目と州のあつたてのあつたて

七人をあつたてのあつたてのあつたて

やまのあつたてのあつたてのあつたて

雲のあつたてのあつたてのあつたて

山田のあつたてのあつたてのあつたて

うた上川のあつたてのあつたてのあつたて

元禄二仲夏

芭蕉のあつたてのあつたてのあつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

六月十六日与
若助亭より

清きや海よ入らるる川

月を切りぬけ信の浮き

黒鴨の飛り居の空明し

林のぬよあさん雲まれ

波その折をゆりて糸と信

船にゆりゆく舟の油火

若

令直

不玉

定連

若良

任曉

不機嫌のふよむもふ恋衣

扇に

直にのほそ

又月や六日の暮のたふし

若

高を截する 桐の一束

た栗

船旁にぬそく燈を分て

台良

船の小船をたせ与る

眼路

鳥啼むよよととんたりりり

世竹

松の本向より響く松やり

布華

夕風庭吹拂ふ石の庵

石雪

響より響く殿の川水

排字

さひくけぬ篋を借ふきよひの

架

さぬくの場よ起しきりり

良

投く小眼の糸は指はきて

義年

鏡より照る鏡よりい

存

吹く鏡の鏡を月の色落す

柔

麻川にさる大はしくさよ

雪

碓氷の山を登る女雲衣

踏

昔の山と二人のふ本の宿

架

茶の垣を登りて星りそよ

年

蝶の羽をむしりて綿端の紙

雪

其のふり髪新髪を削りて

花

昔の色くよしくれ文

良

旅をこして道の系と仰けたの主
 あつて浮雲は凡よこせりまきまよふ
 思ひのやゆたら抱くまきまよふ
 日毎七日と暮るし本曾の瘦もた
 二夜の日を靉お又うし海よりうら
 衣久ふふ里あつと遊むの風雲と
 ちりし系鞋かうしれき一の書よ

こゝの半志あるは情をさむ
 夢にけふふ年七さる旅なりとや
 百世にらふく力感あるをや信しと
 今紫立園に捨遣りて母のを思ひに
 くらゐのうぬひてくれ、附録よ
 志し一夫人の句くをさるゝあふふ
 海をを懸てふふふ西時のほれ
 心はさく過客の半夢おをむ

よしのつらつらあのみこむと科を以し
やとんたのつらに河原の

月意園辨

そのまゝを

記し終る也

四時口辨

柴立園

海青

えりや竹上候式の村す光
嵐色に白禰川之つりさ焚始
拂ふより喜よ返りて川の雪

寛栗亭よ詠の誓預ちたり
梅の宴極して花んよく咲け
よそに地耳よとて料幣
法をうけら連りれハそ々に

梅の茶むすれ付古新端りか

ひより寝の如き踏より猫の志
常よ眠てたるとちや川と啼き
けしむる来らぬうつる露の風
恙いりし抱はるる月
池水や交り流るるの白松
むしきしを葉や離れ膠りけ
花並むしきさきさきけ合
かの河に橋あり夕アか

兼光の春の端はけり哉
女房うはふやまにけり夜久
恙系してぬの流る 柳如か
暖いよけりけり牡丹は
かほくや虫こころぬ細き
之日月や葛蒲よけり細基手
る雲の空たてしやとけり
あり雨や夕の雀も水の下

故を火や獨りぬり往をこそ

早崎のたけりよ世いりうら

誰かをしるる常りりとて

誰かをしるる常りりとて

くみく罪法りりり血白田

大勢よありて立はく清水水

法れり鳴りて眠りては憐の衣

鬼灯や先口と乃秋の声

自好

ちりぬ葉よ刺結はくむ心水

盆外やあふりりさのうけ掛

あふりぬ故屋はぬ衣の袂は

初層やうきる禱の流りとも

名月や花見ね屋とねを付り

灯とさる夜をさむふに月見か

ひよのと花見とさむり一旗の表

下家や鬼と耳を片に流て

題坂月

水比月今夜の様も手に出る

葉鶴乃く朝流うると
くは強よ

秋草や朝日夕日と徳の異血

お撲より向ふ市凡のを取落

叶の戸にのらるるもの
ありその時

盗人し泣めてしりぬはむじ

ち川に五跡しほくも怪う非

急ぎ次講日光膝の匂いか糸

浮世のさう所より流石のま
うけあるは吾とく川をさそ

舟のの祢々くゆら川流を

おのの身と枕よ鴨はうき祢小

さびく交物のかさちには流る

優婆塞に比五さく向ふお取外

山深くて淋しくなりぬるも昔も

龜井戸へ
あつて

梅一編朝日とぬむ冬至系
誰そ来い大根切でん唐の雪
菜魚や吹くえーあたり雪
家家之志る杉掃も吹師走
川年よふおこ十も持しゆわ

四季和合海

霜よ枯しあふたうの吹を風畫
灯ふ白しあめん及此月

老嵐肝

ささうく彩酒は似たり山櫻

木爾

又七所歩けて来る名久衣

夜の水白さを踏ふ天竺川

あゝの系も目を突きし枯葉

不梅や書戸もかきさ響あし 汲泉

春梅や遠よりくさくさ外のみ

木は葉を梅は白くは黄とけり

春人も目もくし如雪の梅

河もよきさくしを小田の石 新満

火く沸て念仏きこゆる物舟は

酒のあふ宿尋孫よりよの月

初雪や被の雪と揮ひよ緒

澄みかすしやハ入相の雛は声 杉舎

傘とよかめしゆる若菜汁

物菓をのこすあじとて

むかしや枯てるもあふ草の市

批灯の其^あ終^りむし雪は上

隠指取の巻まきし一桃の空 左英

引くし一髪入虫はやちまに

草のまやもくしむし小星の帯

折唇くましくてゆきく物

うやそきつり目ついで日らさるる
葉五

名目やせうしつ海のうらみ
巽

人を皆水よあふりて中さふ
巽

雪松の杖たてけはつのも
李山

つとせう山の河干やかんとも
李山

角たてきき破るふ鍋牛

秋まじふぬ樹の身北南若引

葉とるは月宮系の小ま引

竹上を思ふも
全

まる中人のつれはあ
恭桂

一とせ徳奥に有る時雪中
多一して
下は卯月二二より若ぬ
つれはあ

象
つれはあ

鴻の三巻あり

まの秋中身の毛の動くた戦場

管母にをくつゆら若らね

数宗之内此如之乎結の意

此園

夕暮の江流一川 柳の衣
河之平流 小思系の雲掛

春生冬の葉山子に破蓮蓬

二之足に如る 柳 糸

田川

恙竹上流 柳中 糸は友

柳中 月の流中 流は子

月影に控痛ける 糸 柳

七弦中 糸 常流 雨糸

蝶布

不端の志は如流 白牡丹

如之 糸 拍子 志は如 糸 糸

流 糸 志 雪の流 糸 糸 糸

柳 糸 糸 糸 糸 糸 糸

左役

文川 子 子 流 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

愛栗

麻 糸 糸 糸 糸 糸 糸

為徳吟色いん枝一葉さして
平舎

夕月多中蒲團はたしたぬのき

ははふーに蚊の来て喰ふ夜を分

燦竹の雲やう掃一月夜哉

常此現くや菽の梅のそ如
好流

川鶴のうら月てゆる涼いよ

聖の衣隣村つとがとらふ

翁の角穴湯堂らうきをかふ

苗代やととせふとらふみ水乃色
共一

晴はらぬ雲よ舞する田植をな

八朝や腹とと心の露の玉

新糸の古塔あつさや初河を

常中いととる啼て啼くあふ
州也

之粒てもぬの捨くぬきるふ外

おのの羽をさよすの秋の桐蝶は

聖の捨てけとタアもかきけり

菊苗中林に表亦所白く坊

里夕

夢裡の染も肌細く菊の丘

印然子ちいそ菊の白く坊

菊植之居 花の亭子 蓬舟の

行陸舟舟舟

土松六播

花咲峰も腰 虫の星月夜

子田の念と云

赤紙

花の浮き花とて 芥子坊

葦里の思とて 芥子坊

ち花は付のふ 芥子坊

川書中 菊子の時を 芥子坊

日

野紙

壺中 柳を立て 菊菴子

菊の朝子 菊中 菊志丸

心の中 世とて 芥子坊

腰 芥子坊 芥子坊

鏡考

然風 芥子坊 芥子坊

花 芥子坊 芥子坊

赤石

初宮に 芥子坊 芥子坊

雨ふくに何を鐘と云燕の差
比翠
吹よけけえを抱也有るは
公

又月や多きと云也雲破り
青秋

風よ水もくわし河原うふ
遊

七條や只よと云の夜明と
遊

秋風よ柳よけ多の西名の海
千里

まよせの川伸よる柳りふ
千里

秋風の川志と云る柳り

ちる葉や梢よ秋雪の富士
杜岳

まね月や雨よ通きしりの雪

各月や夜と云らる田子は浦

木がしや鐘の中の不二雲雪

何くの葉吹あけてねをる月
魚樂

三日の月標と踏ふ夕ア加ふ

比まよる柳もちり吹る月の

値よ多き啼きり夜ま月

白鷺の尾に纏うはるを雪は
日晝や輝と喚く雪の如き
如と切る雪のうらや秋の風
雪の如きはひやのふれは

久通しき中

誰人の凱陣より我陣を去
其せりちるや雪の如く
是を懐くは杖かむせ七夕

水底てうが柳のそよよ水
美人

庭下の茶室のむすむす
葉捲く如きは水はくもみち

埋火戸背中は向う水の意
吹く雪と水はくもみち
頃賀

冬の日にくくて高し国の雪
日比柳や花を積のけりし
魚齋

白鷺の尾に纏うはるを雪は

吹流と茶と送らや茶屋川 曙る

美竹や角のうねる茶の尖

山月半海もる藤の赤うか

竹を桐と誤り茶の葉を赤

敷入み白水流をいふうね 半賦

美舟のつれなく音しぬの枝

浮舟の揺ちしり茶を花

茶を井よと一葉なる茶を

茶の葉よちぬや音たぬる監 岡郷

雲をてし照して光るふすし水

音よちて枝より音し照の赤

風よちてけて茶の入りうか

海に日の落ちて茶の葉を茶 秋 既

茶の葉の本に茶よちて茶を茶

相槌もふく茶の葉の枝うね

誰か茶よちて茶の葉を茶

冬散り梅の老木よりりり 月道

初秋の目とさぬせしや葉のど

夕秋の意にも解る日影は 雪峰

鶯籠の屋てもきりり厚山

梅より白い余情や梨の意 半紗

依保川の紅も河を少や青ぬ

初冬の音を疎や風の音

蔓梅をこらしはる所の冬風は

白はるも昔の意や 解り 巴文

雪鳥と名を呼んでくはるる家

雪柳のくはるるを秋の意なり

雪梅や白りぬ風の吹はる

霜代やさるはよする春の月 月砂

凌雪や小松よちるぬ 遠とこら

遠のよと柄の名あり 菊名

冬散り梅の老木よりりり 冬柳

茶畑に竹の島のごう風哉 木倒

野崎や花子に羽の夢の如

草花や始に終る 如まても

瓢箪に浮世を 軽し神如き

鐘響て喚くと 破産の機ふす 寸長

一日の河川や 燃て花如る

まご石の如きと 産る星の如

初雪やに終る 枝と 産る松

長閑さか顔りし中 松守水 園耕

朝しの筈も涼し 秋と

松守水 幸さ 伝来や 夢の如

と 不火の茶也 如まても 如冬暮

一篇も何ごいふ如地 柳水 雪中

よの向よ来て 如るも 小田の如

風戸如す 如えぬ 茶也系

旅宿の御を折りて是迄にお在謀に
向新の心地より返り流しに孫累の
砌中居座の清福し由不斜如印
也坊言如去更科と心けい海に
涼月庵より有くたぐい近曾
か府より部出拍浪ははく草々集
を思はれし物とのよりとたると
又去り候候りよ無月翁翁翁翁
系伝亦雪中老師し由学付話の云
印板より来旨より始末控し印ト

高きを下らむと云ふは流しに御を
返りてせよのりりせんかまされ
すういかりんよめぬと物上ト
尚又集入の思自の世由系付程
の中流二之句お忘りしは存知の
意便存付し物也

夢多き印

七月十日

高き御

ト

延享 甲子 林鐘

洛陽舊門書林

井筒屋
橘屋
治房



丁未

